

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2014年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院		文学研究科	ドイツ文学 専攻
<b>研究代表者</b> (2015年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名	
	文学研究科・ドイツ文学専攻・博士 前期課程2年		馬場 大介	印
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名	
	文学部ドイツ文学専修教授		前田 良三	印
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 人文 ・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 共同 名	
<b>研究課題</b>	ドイツメディアの「フクシマ」報道の言説分析ードイツにとって「フクシマ」とは何かー			
<b>研究組織</b> (2015年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名	
<b>研究期間</b>	2014 年度			
<b>研究経費</b>	(支出金額) 200000 円 / (採択金額) 200000 円			

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

ドイツのマスメディアが2011年3月に起こった福島原子力発電所の事故をどのように表象したのかを主題とした。言説の理論を踏まえて、マスメディアの報道をドイツ社会のフクシマへの集団的表象と見立て分析を行った。つまり、ドイツのクオリティ・ペーパーに代表される新聞社の初期の報道に着目し、フクシマの語りに関して代表的な記事を量的に選定し、次にその内容を分析した。その結果、初期の報道において福島原発事故は、人間が原子力技術はこれ以上制御することができないことに対する倫理的な責任問題を示唆する。この枠組みは、一方では原子力エネルギー撤廃への議論へ、他方では更なる原子炉の安全保障の強化の議論へと展開していく言説的なパターンとしてドイツメディアの報道に再帰していると結論付けた。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ドイツ・マスメディア] [新聞報道分析] [言説理論]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)**1) ドイツ語の修士論文としての結実**

研究成果は、本研究に関する自分の構想を、ドイツ語の修士論文としてかたちにしたことである。本研究は、2年間の修士課程という限られた期間の中で行われた。この期間内に、外国の新聞報道分析に主眼を置き、基本理論の援用、記事の収集、データベース化、内容分析の方法論の明示、その結果から導かれるテーゼの提示を、学術的な手続きに基づいて行った。課程 1 年目では、ドイツ語の専攻研究を読み、扱うテーマの背景を捉えることに集中した。同時に当該のマスメディアの新聞記事を、分析に適切だと考えられる量・期間・テーマ領域を設定し、記事を収集、独自にデータベース化した。2 年目前期では、本研究に妥当と思われる言説という理論の理解とその援用の可能性を探ることに努めた。その端緒として、2-a) で後述するように、ドイツで行われた学術ゼミナールへの参加が功を奏した。その他に参照すべき文献を収集・読解した。2 年目後期では、内容分析の方法論を確立し、さらに必要となる新聞記事の分析を行った。論文提出までの 2 ヶ月間は、それまでの理論把握と分析結果に基づいて、自分の見解をまとめ、テーゼを立て、論文の執筆に取り組んだ。このようなプロセスを経て、ドイツ語で修士論文を執筆した。本研究は、日独の現代文化・社会学の領域を専門とする研究者を目指す自分にとって重要な経験となっただけではなく、今後の日独関係の研究の雛型の一例と捉えることができる。つまり、ドイツ語で執筆したこの論文を基に、海外で研究発表や、小論文の寄稿が可能となる。

**2) SFR による研究成果との関連**

**a) 書籍の購入** : SFR の資金を新聞記事アーカイブの使用料、研究で使用する文献、辞書・事典の購入費用に充てた。まず、本研究では新聞記事の分析が主眼である。取り扱う新聞社 5 社のうち、1 社だけが記事のアーカイブの検索に使用料がかかる。そのため、この年間使用料を SFR から捻出した。次に、先行研究や理論書を購入した。それぞれが高価な書籍が多く、本学の図書館に所蔵していないものも少なくない。ドイツ語の書籍のため、所蔵の申し込みをすると入荷までに非常に時間がかかる。したがって書籍を購入することにより、文献読解をスムーズに行うことができた。さらに、自分の手元で常に使用する辞書を購入したことによる利点も大きい。いずれもドイツ語の辞書で、安価なものではなく、新聞分析という研究上新語に対応した最新の辞書を購入する必要があった。最新のドイツ語辞書の購入、新聞記事の読解の一助となった。

**b) 2014 年 8 月にドイツ・ブレーメンで行われた「言説分析」をテーマとした学術ゼミナールへの参加** : 言説は、人文学の分野において 1970 年以降最もさかんに議論されてきた概念のひとつである。この概念を理解・運用することは容易ではなく、限られた時間で当該の文献を読解するだけでは不十分であった。したがって 2014 年 8 月にドイツ・ブレーメン大学で行われた「言説分析」をテーマとした学術ゼミナールに参加した。その結果、同じテーマ・分野に関心がある若手の研究者と多数知り合えただけでなく、人文学の言説研究のうち、映画・文学・歴史の主要なテーマに関する言説分析のいくつかの例を学ぶことができた。これにより、こうした研究のうち自分の言説概念がどのように使用されるべきなのかについて一定の理論的な道筋を立てることができた。

**c) 資料整理に用いたファイル類の購入** : 新聞記事のアーカイブで収集した資料を整理するために購入した。

研究成果の概要 つづき

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

該当なし